

鉤 鑼

2.



1月例会 / 文化座 / 長塚 節原作「土」

旭川勤労者演劇協会準準会



1月24日(月) 旭川市公会堂 開場5:30 開演6:15

スタッフ

原作……………長塚節
脚色……………大 塚 隆
演出……………佐々木 夢一
考証……………内田 吐
装置……………伊藤 寿美
照明……………穴沢 喜男
音楽……………大木 正夫
音效……………秦 和夫
舞台監督……………栗谷川 洋
演出助手……………貝山 武久
製作……………坂部 計美

キャスト

勘次……………丸山 持久
呉品……………河村 久子
おつぎ……………佐々木 愛
与吉……………喜福和則(こじか)
卯平……………加藤 忠
お内儀さん……………鈴木 光枝
隆之……………川崎 桂生
平造……………鈴木 昭正
茂作……………大久保 信
おたき……………荒木 玉枝
駐在……………田村 人勝
村の有志……………田中 夫
卵商人……………小金井 宣興
周旋人……………古川 信二
青年A……………佐々木 雄孝
B……………伊藤 男
C……………水谷 勝
番頭1……………金親 保雄
2……………小倉 馨
百姿男……………南 治子
坐女……………遠 慎
村の女1……………中沢 敦子
2……………坂井 しげ子
3……………高 頼 けま子
武州へ1……………藤 あゆみ
行く娘2……………白 石 幸子
3……………杉山 公三子
住職……………山口 久雄



ものがたり

筑波おろしの吹きつける鬼怒川べり。黒々と蔽いかぶさる杉森に踏ん付けられるようにして勘次達の家があった。
働く事ではひけを取らぬ勘次は僅かのたしにも利根川の開さく工事に出かけていた。女房のお品も百姓のあい間にコンニヤクを売り歩いたが、身ごもった胎児を自らの手で墮ろしたのがもとで死んだ。野田で働いていた舅の卯平は、埋葬の日に帰ったが唯一言、「死に目にも会わせねえで」とつぶやくのだった。お品のいなくなつた勘次一家では、娘のおつぎの手には何回もまめが出来てはつづれた自分の土地を持ちたいと一生懸命になつて働く勘次。だが卯平が残した借金の為に畑までも手離し加えて卯平が年老いて帰つてきている今、苦しい生活の中ではどうしても勘次は舅を暖くむかえることが出来ないでいる。

一向に借財のへらぬ勘次はいつか他人のモロコンの畑にカマを入れる。モロコン畑の持主平造は、監獄に入れると意気どむが地主のお内儀のはからいで警察沙汰だけは免がれた。
冬の日、息子の与吉のあやまちで卯平の小屋から出た火は勘次の家を焼きお内儀の家の一部を焼いてしまった。家を焼かれた以上、卯平をひき取れないとする勘次に、村人は村八分をお内儀に訴える。首を吊ろうとして果さずに倒れた卯平、おつぎは静かに勘次に訴える。
「同じ火事に焼かれても、おら達あ堀立て小屋も建てられねえけんど、すぐ前より良えのを建てられる家もあるんだぞそれを同じ貧乏人から村八分にされて、お父うはどうするつもりなのけ？」いつのまにか成長した我が娘を勘次は不思議そうに見つめる。

解説 ― 「土」について

今日に生き

明日を夢みる者に

時代をこえた感動

原作「土」の書きだしですが、

どの章にも自然の風物、季節の移り変わり、年中行事などを徹底的に克明に描きだすことを彼は忘れていないのです。それは「土」の主人公達、貧農勤次一家の背景としてそれらが克明に描かれていったという小説の常道として読むことはこの「土」の場合あたらないように考えます。それらもまた、小説の主人公としてみることができずからです。それは作者の自然全体に対する強烈な愛情からであり四季の自然も風俗も行動も、そのなかで生活を人間もひとしく生き死んでいくものとしての愛情からでありましょう。

日本の近代文学史にはじめて農民の生活を正当な姿で登場させたのが、この「土」であることは誰もが知るところです。文化座機関誌第二十五号の「土」の上演の中で、

「農村の機構も風習も第一次

世界大戦後急激に変わり、現在の農村は、もう「土」に見られるような半封建的な土地所有の貧農の時代は去り、農地解放によって昔の地主にとって代つて、独占資本が農民を取奪するようになってい

ます。そしてこれに対抗すべく農民が集団としての結束を固めているのが現状です。ですからこの様な観点からすれば「土」の世界は一見もう過ぎ去つた過去の時代でわれわれにはもう関係のないことのように思われますが、しかし実際は決してそうではなく、沈滞されたものとして私たち日本人の骨肉に深く住み、それが日常の行動の原理を左右していると思えるのです。」と上演の主旨が述べられています。日本人の骨肉に「土」の世界が深く住みついており、そして私達は「土」の中から新たな自分自身を発見し、「土」を耕やし続けていかなければならない課題が生まれてくるのではないでしょう

十月二十五日(月曜日)。旭川労働会館一室に於て、第一回サークル代表者会議が行なわれ

ました。

今回のサークル代表者会議の議題は

(1) 労働会則原案討議

(2) 十一月例会収支予算計画の確認

(3) 今後の会の方針討議

―と三点。

しかし、かねてより事務局から会の案内を出していたにもかかわらず出席者数は十名という低迷ぶり。予定の討議は、後日改めて行うことを確認するにどまりました。

それぞれ各サークルの代表者としては、市立病院、盲学校、高専、電々公社、金融、地域

日本の新劇と呼ばれる演劇運動は、近代ヨーロッパ演劇を早急且つ完全な形で移植から始まった

だが小山内薫は「戯曲は文学である。文学の為に存在するのは新聞である。雑誌である。単行本である。印刷物である。文学の為に存在するのは演劇ではない。」と

名作主義であった当時の新劇を批判し、土方与志と共に築地小劇場の建設にのりだした。そして、商業演劇ではとうてい上演できずもない。実験的な、研究的な舞台形探を試みたのである。

新劇の自律性を確立した意味で

「機関誌「銅鑼」の名の由来について

築地小劇場こそ日本の新劇の第一歩にふさわしい。

一九二四年六月十三日、築地小劇場は、丸山定夫の打ち鳴らす最初の

マークをつけたその幕をあげたのである。

「一般に何らかの組織体に入るのをきらい傾向にあるが、労働をやらなければ、旭川でより多くの劇団が上演できないということであり、労働への不参加は自ら演劇を観るチャンスを放棄している。このことを広く市民にアピールする必要がある。」と確認し、その宣伝方法としては、会の一部のメンバーや地元劇団にたよっている現状をまず打開して行く必要がある。さらにそれを克服するには各サークルの自立活動を早急に行なうて行く必要がある、とのこと。

そして、今後、このようなサークル代表者会議を定期的にする。しかもより多く開催し、たくさんの方の声を直接聞きたいという要望が出され、九時に会は終了致しました。(事務局)

サークル、教師等で構成。会は各人の自己紹介に始まり、各サークルの活動状況、抱負等の報告、その後、どのようにサークル活動を推進して行くか。また、どのように労働を旭川に定着させて行くか。どのように会員の仲間を拡大して行くか等、活発に話されました。

サークル活動報告によりまずと各サークルとも歩き始めたばかり毎月の会費の徴収と会員お互いのつながりを保つのに精一ぱいの様子。次回例会の脚本討議や観劇後のデイスカッションを含めたサークル自体の日常活動まで成長するにはもう少しの時間が必要のようです。

今後、労働会員をどのように拡大していくかという点については

「機関誌「銅鑼」の名の由来について

築地小劇場こそ日本の新劇の第一歩にふさわしい。

一九二四年六月十三日、築地小劇場は、丸山定夫の打ち鳴らす最初の

マークをつけたその幕をあげたのである。

新劇の自律性を確立した意味で

「機関誌「銅鑼」の名の由来について

築地小劇場こそ日本の新劇の第一歩にふさわしい。

一九二四年六月十三日、築地小劇場は、丸山定夫の打ち鳴らす最初の

マークをつけたその幕をあげたのである。

みんなのこえ



「どん底」を観て

蠟川真澄（高校生）

幕が上がり、まず最初に目に映ったのは、なんて暗く感じられる劇なのだろうかということでした。「どん底」とは人間が落ちる所まで落ちてしまったという人間の姿生活を物語っているのと思うのがあたりまえなのかもしれないが、私はこれを行っている一人一人を見てそう感じ、また感動もしました。

演技をしている人の力がこんなに大きなものだと私にとって大きな大きな最大の発見です。内容的には始め暗さばかりが感じられて、私には理解がたい所が幾分いや沢山あり、あくびも何回か出そうにもなりましたが、あの年老いたルーサー爺さんが出てきた時何ともいえない楽しさやおもしろみを感じられて、今までの暗さがバツと飛んでしまったよう。

カッコも良くないし、やっている事もただ放浪の旅のようだが私は、その暗い生活を送っている人々の助け神のようにさえ思えた。

それを行っている人を本当のルーサー爺さんと錯覚をしてしまいそうにそれだけルーサー爺さんが私の頭に焼き付いています。すばらしい一言です。この劇は楽しくもないし明るくもない、でもそれなりに胸を打つ演劇でした。少し物足りなさを感じたけれどもう一度見てみたいなどという気がします。

「どん底」を観て

阿部悦子（高校生）

題材に記されたとおりの「どん底」の世界。舞台の一つにも華美された点のないリアルな舞台が「どん底」の名にふさわしく、その状況を目にありありと見せつけていた。私はこの作品を誰からかに紹介されて頼りなげにも覚えていたのですが、公演が来ることを知らされた時は是非でも観てやろうと思っていました。騒然とした会場の中に幕が開くと、眼前に見たこともない不思議な世界が展開され、脚本通りの暴言から暴言へと会話が連らなっ

「どん底」を観て

ていく。世界からつまはじきされた数人の人間達が穴倉の中でむじなの如く往来し、時ならぬ罵声を発しながらそれでも尚生きてゆくために共同生活を営んでいる、ああもなりながら「生きる」という事実の中に彼等は何に魅力を感じ何に未来をもつて生き続けているのだろうか……。そんな疑惑の中に役者の自殺があった。その「自殺」に私はとどめをさされましたこの物語にまさしくふさわしいラスト・シーンなのではなかったでしょうか。このようなタッチを身近に鑑賞できて本当に良かったと思っております。

「どん底」を観賞して

うちくら やえこ

「どん底」を観た後の中には、大きな感動が位置をしめていた。それは、あの劇の内容を色々な面で生かしていたものがあつたからかも知れない。少ない観客であつたにもかかわらず、「どん底」を追究していくキャストの人々、表現の一つ一つに真がこもりそしてひきつけるものを生み出していつている。ピンと張りつめた観客者と演技する者との心の糸、それがあの会場を出た時の私の感動だったのだから。「人間はすばらしい」「人間はすてきだ」。何

も感ぜず毎日を送っていた私に改めて呼び起こさせたのがあの言葉いかなる所でも生きていく人間の姿、強さがすばらしいのだから。学生時代、周囲の働きによって二・三度、本格的な演劇を観賞してきたが、その都度、深い感銘を受ける。観客と劇を構成しているものとの一体さから私は何かを教えられ成長していく自分を見たのである。

「どん底」

大杉 満

にーいーんーげーん
人ー間 ステキなものだ
人間は尊敬すべきものだ

「どん底」のサーチンの言葉。人間はみな、すぐれた人を生み出すために生きている。僕が「人間」ならばきつとそうはず。これから育ち行く「人間」を不幸にしないために、まず僕達が幸せでなくてはならない。今日から明日へ踏み出す一歩は、強く、たくましく、バネのような一歩でなくては。

原稿募集！！

内容は指定致しません。芝居の感想、サークル紹介、労演へ入るきっかけ、思っていること、等々……。機関誌部へお寄せ下さい。

送り先

旭川市神楽町二十二区

加藤雅敏

奈良、平安、鎌倉……江戸十数世紀に亘る日本民族の文化財産

原典に近い姿で再現

複製日本古典文学館

募集中

(株)図書月販旭川営所業

旭川市1条10丁目 鳴岡ビル TEL 23-0148

・監修、編集 日本古典文学会
刊行 日本古典文学刊行会
・監修者 久村潜一 麻生磯次
山岸徳平 市古貞次

「ガラスの動物園」を観て

友田 俊子

久しぶりの演劇観賞であった。文学座の公演は以前に「欲望という名の電車」を見たことがあった。

やはりアマチュアでは味わうことの出来ないプロの臭いというか洗練された良さがあつた。舞台全体のつかい方、照明の効果が良く出ていたと思う。

だが、その半面あまりに慣れすぎていて舞台を見ているというよりテレビを見ているような錯覚にとらわれた時もあった。出演者がテレビでよく見ている人だったせいかもしれない。

話は私達の家庭にもどこかしら共通点があるような気がした。母親が娘を早く嫁に出したいと努力するあたり、息子が仕事や母親の束縛からのがれ自由になりたいと思うあたり、私自身、自分に置き換えて考えてみると、私の廻りにもたくさんあるように思った。

しかし半面、自分が母親になった時の事を考えると物語の母親と同じになるのではないかとという恐怖を覚えずにはいらなかった。

この舞台を見て、いろいろ考えさせられる事があつた。これから良い舞台をどんどん見てゆきたい。

「ガラスの動物園」から

三好 和明

大変に楽しい芝居だった。ヒステリックなアマンドと、気弱なローラ。束縛からのがれる自由を求めるトムと、野心家のジム。それにもう一人、全ての過去を捨てた「こんにちには、ごきげんよう」の父親。わずか四人と一人がくりひろげる家庭劇。水も漏らさぬようなりズム。快い役者の語りと動き二時間以上もの間、僕は飽きずに楽しむことができた。

しかし、水も漏らさぬはずのお芝居は、何故か僕の感情は漏れるばかり。観終えた後、貧乏人根性の為か会費分だけは自分のものとして得ようと努力し始めたのである。

僕は、あの父親は別として、四人の持っている人間の弱さを大なり小なり共通のものとして持っている。だが、語り手でもあるトムが最初に言うように、あれは追憶の劇である。ならば僕にはその人間の弱さを自ら克服して行く作業が残されている。そう思った。

当時のアメリカの時代と、今の日本の状況とはあまりにも似ていないではないか。彼らは一九三〇年

代のアメリカ人々がジャズや酒とセックスに明け暮れながら経済の不況の荒波と、近づいてくる戦争の足音におびえていた時代の被害者であるかも知れない。だが、我々は、少なくとも僕は、そういう被害者になってはいられない。彼らのもっている被害者意識は、とりもなおさず加害者側でもあるのだ。

わずかな出来事から自分の美しさ、自信を見つけ出したローラ。その姿は美しいと思つた。だが、それだけでは、あまりにもかほそいではないか。たとえ、キラキラ光っていても、それはやはりガラス細工ではないか。

「ガラスの動物園」を観て

竹脇 恵子

話の流れ、舞台の人物の動きを追い、セリフの間のうまさに感心し、ただ黙々と舞台を見つめて、いざ演劇が終ったとき「はて？」

「はて？」ってな具合になつてしまった。どうやら私は「戦争と人間」の高橋悦史、「橋のない川」の寺田路恵の動きに目をうばわれ彼らのイメージと混合して、内容の理解にはトンと無感心であつたのかも知れない。

いやいや無感心であるはずはない。この演劇は、何を言いたいのだろうか、登場人物の一挙一動に目を配りながら自問自答していた。――母親がうるさい位に子供達に期待をかけたのも、あの時代背景がそうさせている……弱い人間の象徴みたいな姉のローラがジムの出現によってわずかに勇気を得たこと。トムが母と姉を愛しながらも、冒険、自由を求めて家を出ざるを得なかつたこと。etc etc――しかし、見終つた時感じた「はて？」は劇自体、もの足りなさがあつたのではないだろうか。

やはり私は舞台の冒険者達を、うらやましげに見ているだけに終つたようだ。



Coffee & Hi-Fi Music

名曲・珈琲

ウイーン

4の8右4 TEL@9205・6502・9880

勤労者みんなの銀行



北海道労働金庫

サークル通信

日本通運サークル

私達サークルは五名から出発しました。

『どん底』公演の後、合評会を開いたり、でだは案外好調の様です。分散されている職場の状況から、何か用事でもない限り、なかなか集つまつて話し合うなど少ないのですが、そんな点に先の合評会はおおいに展望を持たせてくれました。まずは『どん底』の感想から始まった訳ですが……合評会を開いたのが遅くて感動も薄れかけていたのか、その方はほんの少し……。あとは職場の話、組合活動のこと、自分達の将来のことへと話は進んでいきました。

第一回目のこんな集りを、とても合評会などと呼べるかどうかわかりませんが、一語に『どん底』

を観たという共通の場があったからこそ、この話し合いも広がっていったのだと思います。

自分達の生活の基盤である職場で、単に職場の同僚というのみでなく、何かしら人間的な触れ合いを感じさせる、本当に話し易い仲間になっていけたら、どんなに素晴らしいことかと思つてみたりしました。そして私達からまた大きく輪を広げていけたらなどと考えています。演劇には全く素人の私達ですが、お互いの思考の中から話し合いを中心にして何かを見つけて出していったらと思つています五人だった会員も、皆の頑張りがきいてか『ガラスの動物園』に向けては、十名を越えました。今度の合評会は私達サークルも、十二名の大世帯です。

「旭川教育大学サークル」

現在会員は十二名。労演活動の基盤になるサークル組織の欠点は会員お互いにあるけれど、忙しい連中ばかりで、サークル体としてはまだ育っていません。

なかなか学内での会員が増えないのは大学の文化問題への取り組みが上げられますが、従来加盟している会員の働きかけの弱さもあると思います。また会費の月五〇

〇円も学生にはきびしい金額ですが、しかし、きびしい条件はどれも同じです。今後は、まず、今いる会員十二名ががっちりしたサークルにして、より多くの会員を増やしていくよう努めていきたいと思っています。

旭川盲学校サークル

現在会員は十二名です。皆んな若い人ばかり。「どん底」の公演は全員でみましたが、その後の合評会などはそれぞれ仕事の関係や私事の用事も手伝つてなかなかひらけそうにもありません。それでも、なにかの機会を利用して、二・三人の人達で演劇のことを話合っています。

「奇蹟の人」「どん底」共に、サークル内では大変に評判が良いです。

今回の「ガラスの動物園」の例会を通じて盲学校内にとどまらず、広く多くの方々が私達のサークルに参加するよう働きかけて行こうと思つています。

旭川高専サークル

八名の会員でスタートしましたが、まだ一度も集まりが持たれていません。

先例会の「どん底」は八名のうち七名が観劇しました。とてもお

もしど、かたつたとの意見が寄せられています。

十一月四日の「ガラスの動物園」は是非全員で観後、話し合いの場を持ちたいと思つています。とてもおもしろく、楽しく、すばらしい芝居をもつともつとたくさん観よう。そんな芝居をさがし出そうと、皆んなでワイワイ言い合えるサークルになりたいと思ひます。

二人だけのサークル

砂原 紙 店

三人いなければサークルにならないというサークルの基本形態からいくと例外サークルとも言うべきところ。それでも事務局さんから認めてもらった立派(?)なサークルです。

「どん底」「ガラスの動物園」を観終えた後、仕事中でも手を休めることもなく合評会ができます。会費の納入もきわめてスムーズ。ただ、いつでも会うことができるという安易さから例えば脚本の読みとか、じっくり腰をすえての合評会は今だ出来ずじまい。これからは脚本の読みや合評会ももちろんですが、一日も早く一人前のサークルにしようと思つています。それから、いろんな労演サークル同志が集まる機会があったら素晴らしいと思つています。

ちよつと

こみみに

はさんだはなし

〇高橋悦史さん、今か今かと待つうちに、とうとう一幕終つてしまひ。

〇あの野郎！入金金しか払わんで覚えてろ……取り立ては敵しいんだから！

〇ローラは泣いていた。あの場面で、涙するなんてさすが名優！すごい集中力。

〇「ガラスの動物園」よかつたよかつた。

〇合評会どうしてしないのだから。

〇パンフレット二〇〇円。

〇高い！高い！もっともつと安くしろ。

〇照明がとても素敵だった！あんなライトの中で彼を相手にワルツの練習etc……想像しながらニヤニヤ私一さでさてーああ！現実の淋しき、切なさ、いかにせん。

〇終りの幕が閉つた後も、まだ続きがあるのじやないかと腰を浮かして迷つた私。……一言くらい挨拶があつてもいいのにと文学座相手にふくられてみる。

1972年の例会づくりのためのページ

みんなで希望をもちより、サークルで話し合つて
すばらしい例会を創つていこう！

72年の例会候補作品

文化座	土
文芸座	ち
文芸座	妻
文芸座	ん
俳優座	母
前進座	国
山本安英の会	鶴
仲間の座	森は生きている
東京芸術座	ど
東京演劇座	アンサンブル 奇蹟の人
青年座	夜明けに消えた
青年劇場	ロミオとジュリエット
東演座	浮標 明治の枢
三十人会	秋浜悟史の作品集から2つ
		英雄たち、リンゴの秋、
		しらけおばけ、ほらんばか
関西芸術座	てのひらの詩
民芸座	星の牧場
文学座	アンチゴ
		あわれ彼女は娼婦

一月例会の文化座「土」の公演はすでに決定済みであり当然のことながらその取り組みを開始しておりますが、三月以降の例会は、東北労演、北海道労演との話し合い折衝によって決定いたします。

十一月段階では、かなり難行しており、正式例会決定は一月にもちこしそうであります。しかし、いづれにしろ、上記の他はまず考えられぬと思うので、手に入る脚本や原作を読んでもおくのも必要だと思えます。

なお、今まで散発的であったサークル代表者会議を定例化し、その場で各サークルの希望や意見を出し合い、それを北海道労演の中へ反映させていくという、より民主的労演作りへと発展させていきたいと考えます。

室蘭労演準備会が再建されました。函館、札幌、旭川と三都市にしかなかった労演がこれで四都市とふえ、北海道労演が着実に成長しています

九月例会「どん底」、十一月例会「ガラスの動物園」と二つの例会を旭川労働準備会としてとり上げて来ました。これらの例会を通じて、「労演ができて本当に良かった」、「芝居のおもしろさを発見できた」、あるいは「労演活動はこれでいいのか?」「労演の運営活動に不満だ」等の会員の率直な声が事務局に寄せられて来ています。私たち運営委員会は、ともすれば単調で無感動なものに陥りやすい日常の中のささやかな感動の回復の役割を労演例会が果たつてあることを評価しつつも、今後の労演活動のあり方を会員全ての問題として考えて行きたいと考えてまいす。

「芝居を観ること」は個人個人の自由な意志によるものであって、会員として半強制的に観るものではないという考えがかなり根深くあります。それは確かに芸術鑑賞の一つの態度として否定できない側面を持っています。しかし現実の状況の中では、個人バラバラな「自由な意志」は自分達の演劇への要求を満す方向に向かうのでしょうか。私たちが「芝居を観ること」と「労演づくり」という一つの文化運動として捉えることの意味もそこにあります。現状の中で「芝居を観たい」という個々人の自由な意思の達成は、必ず他の人格の自由な意志への呼びかけを必要とする。と考えるのです。演劇を愛する人々、生活の中で演劇を求めている人々は三十万の旭川市民の中にまだまだ存在していることは確かです。私たちに今必要なのは、まず何よりも数多くの人々への呼びかけ以外にはないと思うのです。そして、それは今までのような運営委員や事務局、一部の人々の諸負いでは最早不可能です。一人が一人の

何よりも会員の拡大を！！

旭川勤労者演劇協議会準備会運営委員会

新入会員をノック——私たちは次の一月例会に向けて会員拡大の意識を訴えたいのです。

又、労演の運営の基礎は。サークルにあることは言うまでもありません。そして今までの活動もサークルの組織化に重点を置いてきました。しかし、サークル代表者会議がまだ一回しか設定されていないことに端的に示めされているように、サークルを基盤に、サークルの持つ要求や問題を労演の運営に反映する手だてが欠落しているのは事実です。一月例会に向けて、会員の拡大をも含めて、サークル代表会議、会員総会を地道に積み重ねてゆかねばならないと考えています。そして、会員一人一人の労演運営への主体的参加を保証する運営、更に、合評会、作品研究、演劇についての理解を深めるための学習会や講演会、会員の声を反映できる機関紙等の創造的な活動内容をつくり出して行かなければなりません。

また運営委員会体制も「労演つくる会」の運営委員がそのままスライドしており、現状に合わない面がたくさん出て来ています。その点でも、今後の会員の皆様の労演運営への積極的参加をお願いいたします。

事務局だより

○会費の前納制を！

会費はできるだけ例会日以前に払いこんで下さい。例会日にはギャラ・会場費など六ヶタの単位のお金が必要です。今例会も事務局は金策に走りまわっています。

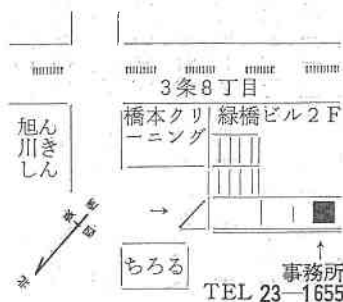
○サークルの組織化を！

現在百名近くの一人ぼっち会員もいます。労演におけるサークルの必要性は、合評会や脚本研究といったためのものだけではありません。会費の納入、事務局からの連絡といった事務的な側面からも必要なのです。会員の拡大と合わせ

て一人一サークルの枠を破りましょう。

○事務所が新設されました！！

今まで交通の便が悪く、会員の皆さまに不自由をかけていた旧事務所が、三条八丁目緑橋ビル内に移転しました。サークルの会合にも御利用下さい。



へんしゅうしつ

機関誌も今回で二号を迎えました。一号に比べ、応募原稿も多くなり、ページ数も六ページから八ページへと増やすことができました。多数原稿をお寄せ下さいました会員の皆さん、本当にありがとうございます。

また、忙しい中、広告をとって下さった会員の方へ、誌上を借りまして、お礼申し上げます。二号を発行し、また三号への取り組みが始まるわけですが、一号に比べ二号、二号から、又三号へと明るい展望のもと、より大きな飛躍を求めて、会員皆の機関誌になっていける様、頑張るつもりです。

会員の手から手へとこの『銅鑼二号』が渡されていくのを想像しながら、夜の更けるのも忘れて、字数を教え、線をひっぱり頭をひねっている編集室です。

(K・S)